

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	"ヘンド"の民俗誌：巡礼における負者へのまなざしに関する一考察
Sub Title	
Author	浅川, 泰宏(Asakawa, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.99- 102
Abstract	
Notes	平成14年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0099

平成 14 年度 大学院高度化推進研究費 助成金報告

“ヘンド”の民俗誌一巡礼における負者への まなざしに関する一考察

浅 川 泰 宏*

はじめに

本研究は、巡礼者と地域社会の交流を扱った前年度の研究課題¹⁾を踏まえ、そこで明らかになった重要な問題として、特に近代の負者（病人、物乞いなど）に焦点をあて、彼らが巡礼空間に存在しえた宗教的・文化的論理を探ることをテーマとするものである。

2002年1月の予備調査の後、4、5月は文献整理を重点的にを行い、さらに6～8月にのべ2週間のフィールドワークを実施して、地域社会による遍路者へのまなざしや、病人や物乞い遍路への接待の事例などについての聞き取りデータを収集した。フィールドワークについては若干の計画変更があった。当初は3つの地域での比較調査を考えていたが、調査が進展するにつれ1ヵ所での集中的な調査がより望ましいということが明らかになり、調査地を主に21番太龍寺と22番平等寺の近郊（徳島県阿南市西部）に絞り込んだ。このフィールドワークによって明らかになったのは、地元民の遍路者への応対と密接に関係する“オヘンロサン”と“ヘンド”という二つのフォークタームの存在である。

“オヘンロサン(+)”と“ヘンド(-)”

まず、このふたつのフォークタームが表す内容をより詳細に議論するために、“オヘンロサン”と“ヘンド”のそれぞれについての記号論的分析を行った。題材としたエッセイは四国出身の作者が、遍路の思い出に触れたものである（瀬戸内寂聴 1981「はるかなり巡礼の道」『太陽』1981年1月号）

幼い昔、春は巡礼の鈴の音が運んで来るものだと思いこんでいた。（中略）私にとってそれは、まさしく春の跫音であった。何という爽やかな、軽やかな跫音であったことか [瀬戸内 1981: 14 ページ 上段～中段]。

女巡礼たちは、真新しい水色や白の手甲、脚絆をさすががしくつけている。男巡礼も白衣や笠がまだ見るからに真新しくさすがしい。（中略）どの巡礼の白衣も、通って来た春の野の若草の匂いと、ぬるんだ春風の香をしみこませていた [同: 14 ページ中段]。

遍路が春の季語とされるが、彼女も、遍路者は春の使者であり、生命の息吹や鼓動が窺える存在として理解している。そんな遍路たちの足音を聞いたとき、幼い彼女は「おかあさん、おかあさん、おへん

ろさんのおせったい、早う早う」[同 14 ページ中段] と家に駆け込んで、接待をしにいったという。作者の四国遍路の第一印象はかくも爽やかなものであるが、続いて彼女は次のように述べる。

私の故郷では彼等を巡礼と呼ばずに「へんろ」または「へんど」と称した。徳島だけでなく、四国八十八ヶ所霊場である四国四県でも、同じく「へんろ」「へんど」と呼ぶ [同: 16 ページ]。

ここで、「ヘンロ」と「ヘンド」というふたつの名称があることが明らかになる。「ヘンドというのはヘンロの方言である」という見解もあるが、彼女によると以下のような違いがあるという。

子供の私の耳には、「おへんろさん」ということばの響きは、やさしく、なつかしく聞え、「おへんど」と聞くのは、なぜか恐ろしく、凶々しい感じがしていた。大人たちは、ほとんど「へんど」には「お」も「さん」もつけないことの方が多かった。「へんど」ということばは、軽蔑と嫌悪の感情をこめて吐き捨てられていたようだ [同: 45 ページ下段~46 ページ上段]。

ここから、ヘンローむしろ敬称を付けて「オヘンロサン」—が正の属性を持ち、ヘンドが負であることがわかる。この両者の特徴を抜き出したのが表 1 であるが、「親近/嫌悪」「尊敬/軽蔑」「陽/陰」「清潔/不潔」「祝福/災厄」など、あらゆる面でふたつのタームの正/負が明瞭に対比されており、これによって、彼女はオヘンロサンを歓迎され厚遇される存在、ヘンドを嫌悪され忌避される存在として語りわけていることが理解できる。

巡礼者を指し示す言葉に“ヘンロ”と“ヘンド”の二つがあるという事実は、郷土史家を中心とする

表 1 “オヘンロサン”と“ヘンド”の記号論的分析

オヘンロサン	(+)	項目	(-)	ヘンド
やさしく、なつかしい	親近	言葉の響き	嫌悪	恐ろしく凶々しい
敬称をつける	尊敬	呼び方	軽蔑	敬称をつけない。吐き捨てられる
春	ハレ	季節	ケ	※「時知らずの遍路」
朝日	陽	光	陰	陽がかげったよう(陰)
水色や白	明	色	暗	鼠色・煮しめたような色
若草のにおいとぬるんだ春風の香り	香気	匂い	臭気	※くさい(体臭)
真新しく・すがすがしい(一回性)	清潔	服装	不潔	ぼろを着て垢だらけ(連続性)
軽やか	躍動	足取り	停滞	地べたに座り込んでいる
和やか・明るい	開放	表情	閉鎖	顔をかくそうとする
清潔で幸福そう	祝福	印象(門付け)	災厄	不幸と不吉の気配
※たいてい群れ	集団	人数	個別	ほとんどひとり
「おせったい、早う早う」	厚遇	リアクション	忌避	子供には行かせない

(瀬戸内寂聴「はるか巡礼の道」(『太陽』1981年1月号)より)

ただし、※印はこのエッセイでは直接言及されていないが、別資料等から補足した個所)

何人かの先行研究者によって指摘されてきた。彼らは、1) ヘンドがヘンロに変化した（あるいはその逆）とする進化論的仮説〔西園寺 1937: 27〕の、2) ヘンドはヘンロの別名という理解〔武田 1969: 2〕、3) 発話者の世代による相違〔高橋 1997: 25〕などの説を提示してきたが、これらはいずれも基本的にヘンロとヘンドは同一のものを指すという理解である。ところがフィールドでは、「ヘンロとヘンドは違う」と言い切るインフォーマントも少なからず存在する。この先行研究とフィールドとの齟齬は、上記の説が言語の使われるコンテクストに十分踏み込んでいないが為に起こっていると考えられる。そこで次に、この二つのタームが実際の語りのなかでどのように使用されるのかという観点から、聞き取りデータを分析した。その結果、解ったのは次のようなことである。

まず基本的にヘンロもヘンドも四国遍路という大きな枠組みのなかで用いられる。その上で、ヘンロは「信心で回っている」「本物の（遍路）」と形容され、多くの場合、敬称をつけて「オヘンロサン」という形で使われる。対して、ヘンドは「生活のために回っている」「偽の（遍路）」であり、しばしば蔑称として用いられるという対比的な用語である。換言すれば、ヘンロはいわゆる巡礼者で、ヘンドはむしろ乞食²⁾に近い。この遍路と乞食という対比は、遍路類型化の発想に対応する。これは「遍路者」を身なり、所作、所持金などいくつかのポイントで「遍路」と「乞食」に分類し、後者を取締の対象とするというもので、明治期以降、行政文書や新聞論説などで展開されたものである。このように、訪れてくる巡礼者を社会的脱落者（＝乞食）とみなす感覚を真野俊和は「近代的乞食観」と呼んでいる〔真野 1991: 34〕。

次に巡礼者がどのようなプロセスを経て分類されるのかを、門付けの事例に即して考察した。それによると、出会った直後から品定めが始まるが、その決定は、門付け時に巡礼者側から提供される読経などに「宗教性（信心）」を感じる（少なくとも否定しない）か否か—すなわち巡礼者側が宗教的なモノを応じる側が米・金銭といった経済的なモノをそれぞれ交換するという門付けの交換の成立・不成立によって事後になされるものであるし、またその評価も後日、再評価が行われたりするなど、必ずしも一定しない。そして、重要なことは、この分類は認識や評価のためのものであり、応対と直結しないということである。ヘンロでもヘンドでも門付けの対象となることが多く、それは認識の分類が行為に繋がる「近代的乞食観」とは異なる。また四国遍路では信仰対象である弘法大師・空海が今なお生きて四国を遊行しており、時折様々な形で民衆の前に現れては彼らを「試す」とする信仰があり、それがために、仮に汚らしいヘンドであっても疎かに出来ず、門付けに応じるという説明がなされることもある。これは伝統的な異人観に近いものといえるだろう。

すなわち、四国遍路においては、巡り来る巡礼者に対し、一定の基準を満たす者を「(オ)ヘンロ(サン)」として切り出し、満たさないものをヘンドと類型化する近代的な遍路観と、しかしながらその両方ともを歓待の対象とするという伝統的な遍路観のメタレベルのせめぎ合いが言語の使い分けに表象されているのである。同時に、こうしたやりとりは、徒歩巡礼の復活によって現在の民俗としても、徐々に重要性を増してきており、こうした観点は現代における異人性がいかんして発生してくるのかという大きな課題に繋がりをものとして重要であると考えられる。

研究成果と今後の予定

本年度の研究成果は、日本宗教学会第 61 回学術大会（発表題目：「遍路接待の場における宗教性の位相—フォークタームの比較より—」、9 月 15 日、大正大学）、及び日本民俗学会第 54 回年会（発表題目：

「遍路と乞食—マレビト論再考—」, 10月6日, つくば国際会議場)での研究発表を通じて公表されている。また今後は、韓国・釜山で開かれる, 2003年韓日人文学連合国際学術大会(発表題目:「ムラにめぐりくる者—近代四国遍路における巡礼者の類型について—」, 2003年5月24日, 東西大学校)で報告を行い, これらの学会発表で寄せられた批判やコメントを踏まえ, 追加調査を行った後, 来年度以降に論文執筆を予定している。

注

- 1) 平成13年度大学院高度化推進研究費助成金「巡られる人々—四国遍路における巡礼者と地域社会の民俗誌・史」。報告書は慶應義塾大学大学院『社会学研究科紀要』第54号(2002年)53-55ページ
- 2) ここでの「乞食」は, 物乞いを意味する一般的な意味でのものであり, 門付けと同等の意味をもつ「コジキ」, あるいは祝福芸能民であるホカイビトを表すものではない。

参考文献

- 近藤日出男・高橋達雄他 1997 「遍路について」『新居浜史談』第258, 259号, 新居浜郷土史談会。
 西園寺源透 1937 「四国霊場考」『伊豫史談』92号, 伊豫史談会。
 真野俊和 1991 『日本遊行宗教論』吉川弘文館。
 瀬戸内寂聴 1981 「はるかなり巡礼の道」『太陽』(No. 214), 平凡社
 高橋達雄 1997 「おへんどはんとへんど」『新居浜史談』263号。
 武田 明 1969 『巡礼の民俗』岩崎美術社。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

時間弁別における反応—強化随伴性と刺激—強化随伴性の分離

石 井 拓*

Morse and Skinner (1958) は, ハトを用いた以下のような実験で, 刺激—強化随伴性と反応—強化随伴性を別々に訓練した場合にも弁別オペラントが成立することを示した。フェイズ1では, 反応キイを除去したオペラント箱にハトを入れ, 赤色ハウスライトの提示下において変動時間(variable time; VT) スケジュールで餌を提示し, 緑色ハウスライトの提示下において全く餌を提示しないという多元スケジュールを用いて数日間の訓練を行った。フェイズ2では, オペラント箱に反応キイを取り付け, 餌を強化子として白色ハウスライトの提示下で白色キイをつつく反応を形成し, さらに変動時隔(variable interval; VI) スケジュールで反応を維持した。以上の訓練の後, 最後のフェイズ3では白色キイを提示した上で赤色ハウスライトと緑色ハウスライトを継時的に提示し, それぞれの下でのキイつき反応率を調べた。その結果, 緑色ハウスライトよりも赤色ハウスライトの下で高い反応率が観察された。つまり, フェイズ1での刺激—強化随伴性の効果がフェイズ3のテストに転移したと言える。

このような先行研究を踏まえ, 本研究では刺激—強化随伴性と反応—強化随伴性を別々に訓練した場合でも時間弁別反応が生じるかどうかを検討する。時間弁別反応については, 固定時隔(fixed-interval; FI) スケジュールを用いた場面で先行研究が行われてきた。このスケジュールは最後の強化子提示から一定の強化潜時経過後の初発反応が次の強化子提示を生み出すものである。このFIの下で訓練を行う